

## 近代日本のアナーキズム思想の構造——丸山真男の忠誠・反逆論との関連——

板垣 哲夫

丸山真男は明治末期の忠誠・反逆の精神構造について次のように述べている。

徳富蘇峰がさきへのべた言葉を用いるならば、「非戦論」的社會主義（あるいはキリスト教）と「無戦論」的個人主義とはともに、正統的な忠君愛國主義のイデオログからは、程度の差こそあれ御叱りを受ける「風潮」であり、そのかぎりで相互に近い。しかし自我の内面における忠誠構造からいうと、非戦論者の「志士仁人」は無関心派と鋭く切れて、むしろある種の主戦論者（たとえば山路愛山や『日本新聞』同人など）に近く位置するのである。……雪嶺は、「事大主義は危険思想と孰れぞ」（想痕、所収）のなかでこ

うっている。「個人として世界の人類と共にすべく、國家の範域に踰躋するは過去の遺物にして、新時代の新人が旧時代の旧人と態度を異にするは、順序の然るべき所」というような「個人（または世界）主義者」の考え方は、「一見、唯我独尊にして、反事大の如く」みえるけれども、それはただ「新時代の旧時代に代るべきを認め、之に従ふを利益ありとする」か、あるいは「単に欧米の或る部分に行はるゝといふ故を以て之を唱ふる」にすぎず、実は「醇乎として醇なる事大主義」にほかならない。これに反して、「幸徳は忠君愛國主義者が無政府主義者に変ぜし者、更に無政府主義より忠君愛國に変ずるの有り得べき事なりき。無政府

図1

被縛・自発		
反体制	反逆 非戦論的社会主义 (幸徳秋水等)	忠誠 山路愛山 『日本新聞』同人
	非戦論的キリスト教 (内村鑑三等)	
	隱遁 無戦論的個人主義 頹唐的個人 (世界) 主義者	体制 順応 御用的忠君愛国主義
離脱・埋没		

(主義)者たる間の危険なれど、徒らに強者に媚び、強国の強者に媚ぶるに比して如何にあるべき。……」  
 ……雪嶺は幸徳を、彼自らと同じ「熱国家」の陣営に入れ、一見相反する御用的忠君愛国主義者と、頹唐的個人(世界)主義者とのうちに基本的には共通するコンフォーミズムの根を認めたのである。「忠誠と反逆」、『丸山真男集第八巻』岩波書店、一九九六年、二五六―二五八頁)

この精神構造は図1のように提示することができる。横軸は体制に対する態度であり、右(体制)は体制の容認であり、左(反体制)は体制の拒否である。縦軸は、自己が置かれている外的状況(政治、経済、社会)、内的状況(思想、エートス、感情)に対する自我の姿勢であり、上(被縛・自発)は、自我が外的、内的状況に縛られながら、距離を置こうとし、それらの状況を自発的に変革し、また保守していこうとする姿勢であり、下(離脱・埋没)は、自我が外的、内的状況から離脱し、あるいはそれらの状況に埋没し、距離を置いて、自発的に状況を変革、保守していくということがない姿勢である。体制と被縛・自発の結合は忠誠であり、体制と離脱・埋没の結合は順応であり、反体制と被縛・自発との結合は反逆であり、反体制と離脱・埋没との結合は隱遁である。

次に、近代日本のアナキズム思想の構造を、内在と超

越との連関（超越に連関している内在。内在に連関している超越）、内在と超越との離反（超越から離反している内在。内在から離反している超越）の枠組に依拠して分析してみる。超越に連関している内在とは、世界から脱却し、世界を対象としてとらえる超越のありかたを、世界のうちに内在するありかたのうちにとらえなおしているありかたであり、内在に連関している超越とは、世界のうちに内在するありかたを、世界から脱却し、世界を対象としてとらえる超越のありかたのうちにとらえなおしているありかたである。超越から離反している内在とは、世界から脱却し、世界を対象としてとらえることなく、世界を自己から隔絶した対象としてとらえるありかたである。石川三四郎、大杉栄、河合康左右、和田久太郎、辻潤、古田大次郎、中浜哲、後藤謙太郎の思想を分析する。（紙幅の関係上簡略な記述となるので、詳細は拙稿「近代日本のアナーキズム思想と長谷川如是閑の思想との連関構造及び思想的展望」、『山形大学紀要（人文科学）』第一四巻第四号）、拙著『近代日本のアナーキズム思想』（吉川弘文館、一九九六年）を参照のこと）

石川三四郎における前期は、自己と世界の破滅、破壊を志向する虚無的傾向（超越から離反している内在）と他者との

結合の希求（超越に連関している内在、及び内在に連関している超越）との対抗のうちから次第に後者の内在と超越との連関への志向に向っていく過程であり、また内在に連関している超越よりも超越に連関している内在の比重が大きく、超越よりも内在に傾斜している過程であった。これに対し後期は、「虚無的精神」が、自然状態における赤裸々な支配、暴力を制御すべき制度、習慣、科学等を合理主義的追求が創造することの放棄をもたらすこと（超越から離反している内在）の発見を拠点として、内在内部の分裂構造、超越内部の分裂構造を認識していく過程であると考えられる。すなわちアナーキズムにおける、本来的自然としての無政府社会（超越に連関している内在）と暴力に対する歯止めのない如（超越から離反している内在）との分裂、日本人、中国人を含む東洋人における、自主共同のアナーキズム的伝統（超越に連関している内在）と主体的自我の欠如（超越から離反している内在）との分裂、歴史のみかたにおける、環境への適応（超越）に連関している本能への内在に依拠したみかた（超越に連関している内在）と進歩史観（超越から離反している内在）との分裂、制度、習慣、科学等における、社会における具体的機能の遂行（内在に連関している超越）と物象化の進行（内在から離反している超越）との分裂、歴史のみかたにおける、本能への内在に連関している環境への適応（超越）

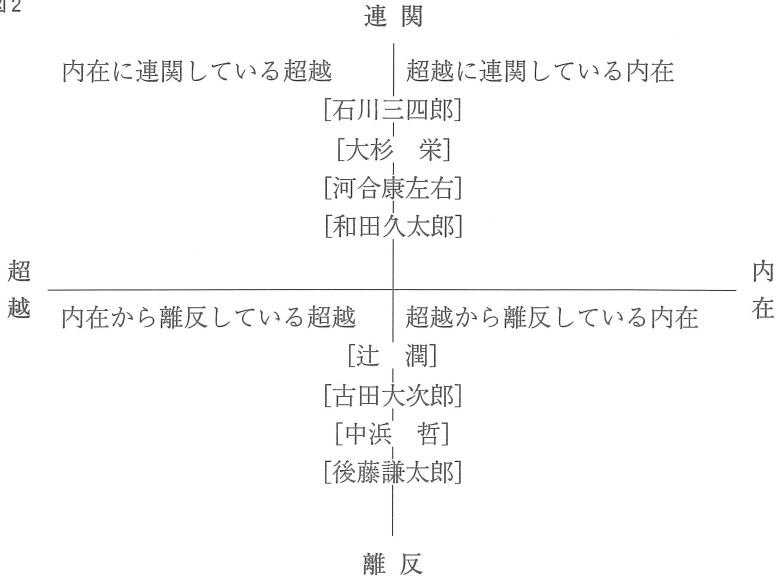
に依拠したみかた（内在に連関している超越）と進化論（内在から離反している超越）との分裂が認識されているのであり、この分裂に対する認識に立脚しつつ、内在と超越との離反を内在と超越との連関が克服していくことが志向されているのである。

大杉栄においては、行為の基底における共同性は超越に連関している内在であり、行為の基底における政治性は内在に連関している超越であり、行為の表層における共同性は超越から離反している内在であり、行為の表層における政治性は内在から離反している超越である。行為の基底における共同性、政治性のいずれにおいても、行為の表層における共同性、政治性を解体し、その幻想における自閉的物象化から脱却し、自立、自由を獲得しようとする。内在と超越との連関のうちに内在と超越との離反を解体、吸収する方向である。しかしまた大杉において共同性と政治性とは乖離した領域であり、超越に連関している内在と内在に連関している超越とは分離しているのである。さらに、外界に対する人格の無力性を指摘し、外界からの人格の独立を守るために、過剰な情報、刺激、享楽から人格を隔離しようとする主張、到達されるべき目標としての自由のイメージが、現実状況から乖離した、感性的、抽象的なものであったこと、知的な分析、反省よりも感覚、感情、気分

の方が、深く、鋭敏な認識であるとする主張、神が人間のうちに存在しているとする主張は、外界への超越から離反している内在であり、大杉において内在と超越との離反が内在と超越との連関とともに併存しているのである。

河合康左右においては、現代文明における自己及び世界についての虚栄に満ちたイメージの構成を、内在から離反している超越としてとらえ、批判し、現実への窮極的到達、一致、及びあらゆるものと戦い、あらゆるものを破壊する、流動する生命を、超越に連関している内在、及び内在に連関している超越としてとらえ、主張する。前者の批判は主観的に追求されることはなく、後者の主張が積極的に展開されている。和田久太郎においては、洞察（内在に連関している超越）と憧憬（超越に連関している内在）とが、白紙主義、社会科学的認識として展開される。また洞察の延長上に形成される、自己と社会とを解体する破壊志向は、内在から離反している超越への方向をもっているが、基本的に内在に連関している超越であり、憧憬の延長上に形成される、現実を超越した幻想的な共同性への内閉志向は、超越から離反している内在への方向をもっているが、基本的に超越に連関している内在である。

辻潤においては、外界の内実を暴露、認識することにより、外界から自己を離脱させていく志向において、内在す



べき自己、外界が失なわれ、超越における内在からの離反が進行する。またその存在が生き生きと体験される世界をとらえ、次第にその世界のうちに没入していく志向においては、内在における超越からの離反が進行する。いずれの志向においても初発（内在と超越との連関）よりは到達（内在と超越との離反）が重視されているのである。古田大次郎においては、社会総体への帰属の志向、あらゆる人間との一体化の志向（以上、超越から離反している内在、総体的な帰属喪失、戦略を無視した直接的衝動としての運動、テロリズム（以上、内在から離反している超越）、ニヒリズム、社会からの脱却の完遂としての死の把握（以上、超越から離反している内在、及び内在から離反している超越）があり、内在と超越との離反が展開されている。中浜哲においては、現実の劇化（超越から離反している内在、総体的な帰属喪失、テロリズム（以上、内在から離反している超越）があり、内在と超越との離反が展開されている。後藤謙太郎においては、生物的個体の生、孤立した生（以上、超越から離反している内在、非現実、超現実の世界に向う、「狂」としての闘争（内在から離反している超越）があり、内在と超越との離反が展開されている（以上、拙稿「近代日本のアナーキズム思想と長谷川如是閑の思想との連関構造及び思想的展望」四六一―四九頁）。

以上の近代日本のアナーキズム思想の構造は図2のよう

に提示することができる。横軸は、右が内在、左が超越であり、縦軸は、上が連関、下が離反である。右上は超越に連関している内在となり、右下は超越から離反している内在となり、左上は内在に連関している超越となり、左下は内在から離反している超越となる。石川、大杉、河合、和田は超越に連関している内在と内在に連関している超越に位置し、辻、古田、中浜、後藤は超越から離反している内在と内在から離反している超越に位置している。また石川、大杉、河合、和田は自己における内在と超越との離反を自己批判、克服することによって内在と超越との連関へ移行していったととらえることができる。

次に図1と図2を比較してみる。図1の横軸、縦軸は現実的、具体的なものであり、図2の横軸、縦軸は概念的、抽象的なものである。したがってこれらの軸が完全に一致することはありえないが、図2の横軸（内在・超越）は図1の横軸（体制・反体制）の基本構造になっており、図2の縦軸（連関・離反）は図1の縦軸（被縛・自発、離脱・埋没）の基本構造になっていると考えられる。故に図1と図2は、横軸は横軸に、縦軸は縦軸に重ね合せ、全体として重ね合わせることができると考えられる。忠誠のうちには超越に連関している内在があり、順応のうちには超越から離反している内在があり、反逆のうちには内在に連関している超越があ

り、隠遁のうちには内在から離反している超越があるのである。

このようにみえてくると、石川、大杉、河合、和田のうちに忠誠・反逆、被縛・自発への方向、可能性、辻、古田、中浜、後藤のうちに順応・隠遁、離脱・埋没への方向、可能性を見出すことができ、また石川、大杉、河合、和田は順応・隠遁、離脱・埋没への方向、可能性から忠誠・反逆、被縛・自発への方向、可能性へと移行していったととらえることができると思われる。

丸山真男は明治末期の精神状況について、忠誠・反逆、被縛・自発に位置づけうる旧世代の田岡嶺雲と、新世代の明治末期の青年とを比較して次のように述べている。「すでに社会の官僚化と専門化のネットワークのなかにある世代は、嶺雲などよりははるかに老成して「リアリストイック」（離脱・埋没―引用者）になっており、「治国平天下的」な慷慨（被縛・自発―引用者）に冷笑を以って対するという点では、「コスメチックに頭髪を光らす」就職第一主義の青年（順応―引用者）も、ニル・アドミラリ「万事無感動」の「余計者」青年（隠遁―引用者）も、世俗に「反逆」する白樺派青年（隠遁―引用者）も、明らかに同じ側（離脱・埋没―引用者）に立っていた」（『忠誠と反逆』、『丸山真男集第八巻』二五八―二五九頁）。明治末期の精神状況について、図1の忠誠・反逆、

被縛・自発が減退し、代つて順応・隠遁、離脱・埋没が顕著になってきているととらえているのである。このとらえかたを図2に変換することによって、内在と超越との連関が減退し、内在と超越との離反が顕著になってきているととらえることができる。

アナーキズム思想の構造をこの丸山の考察と連関づけてみる。石川、大杉、河合、和田、辻、古田、中浜、後藤は明治末期における精神構造としての内在と超越との離反を共有していたのであり、順応・隠遁、離脱・埋没への方向、可能性をも共有していたのである。順応と隠遁とを比較してみると、この八人は表面隠遁に向っているが、順応への方向、可能性をも潜在させていたと考えられる。さらに石川、大杉、河合、和田はこの共有された精神構造を脱却し、内在と超越との連関へ移行し、忠誠・反逆、被縛・自発への方向、可能性をも獲得していったと考えられるのである。丸山の論文「忠誠と反逆」は大杉栄の「反逆の哲学」を、明治期の徳富蘆花、田岡嶺雲等の忠誠・反逆を継承、発展させたものとして位置づけ、さらに、「ちようどアナーキズムの思想が社会主義や労働運動の主流的地位を、急速にマルクス主義に譲り渡した」と併行して、大杉の課題を継承する試み、すなわち反逆を自我から出發させて原理化する方向は、「客観的」な歴史的発展法則のうちに吸収され

て「革命」の陣営では姿を消してゆく」としている（『丸山真男集第八巻』二七二頁）。すなわち昭和マルクス主義について、図1における順応・隠遁、離脱・埋没、図2における内在と超越との離反をその基底的なありかたとしてとらえていると考えられる。

「忠誠と反逆」が再録された論文集『忠誠と反逆——転形期日本の精神史的位相』（筑摩書房、一九九二年）の「あとがき」において丸山は「忠誠と反逆」について、「執筆のはじめ、本稿の叙述はアナーキズム、とくにその代表的思想家としての大杉栄にまで及び、その「抵抗の哲学」のもつ劃期的意義と、にもかかわらずそれがかかえる否み難い思想的弱点にも触れる予定であった。手稿も若干手許にあるけれども、それを今度、完成稿に仕上げて附加することは、全体の編集趣旨に反し、また現在の私には、精神的・肉体的能力の限界をこえた仕事になるので」断念したとしている。明治末期の精神構造（図1）との関連において丸山がアナーキズムに強い関心をもっていたことは明瞭である。

（山形大学教授）